第 23 話「深淵の主」

■前回のあらすじ

エイリール、ドロクを退け、Threshold を攻略した OotRM は、ガルフリーやナムハイアス達と協力して Worldwound を永久に閉じるための儀式を成功させる。
Abyss 側でこの儀式を実施した OotRM だが、儀式の成功と共に Threshold の Abyss 側の部分は崩れ落ち、下の亀裂へと落ちていった。そして、そこにデスカリ本人がテレポートアウトしてきたのだった。

■デスカリとの戦い

デスカリは、巨大なイナゴの下半身に、人の上半身、そして異形の虫の頭を持った化け物だった。その羽の部分はイナゴの群れになっており、常に形を変えている。そして、その手には骨のような素材で作られた巨大な鎌が握られていた。
全く表情の読めない顔で、デスカリは語りかけてきた。
「どうにも、ここまでやるとは正直思っていなかったよ。Worldwound を塞ぐだけならともかく、Flame of Soul Luring も破壊してくれるとはね。これで、ここしばらく最もホットだったワールドウーンド計画もおしまいのようだ。
だが、これで終わりだとは、君たちも思っていないだろう？そう、プランは無数にある。私の領域に無数のチャズムがあるように。いくつかの優秀な手駒は失ったが、エイリールも今度こそ真のデーモンとなって私に使えてくれるようになるだろうしね。
では、君たちの次のヒーロー達も君たちと同じくらいうまくやることを祈りながらここで死ぬがいい」
OotRM の面々には、もはやこれに応える言葉は無い。デスカリの予想を上回る速さで、シロップが突撃してくる。しかし、シロップの攻撃が鎧のような装甲に覆われたデスカリの腹部に当たると、すさまじい不協和音が響き、シロップは staggered してしまった。これがデスカリの Rasping Armor、物理攻撃を受けると相手を不調にさ
せる音波を出す防御能力だ。
一方で、こういった効果の影響を直接は受けないラオツェンの弓がデスカリに何本も突き刺さる。
OD は Startower の封印能力を使って、Deskari の強力な Breath Weapon を封印した。これは、swift で 20d10acid（Acid Resist は効かない）+Poison の Line+Burst を与える Lingering Breath で、Deskari の最大の武器の一つだった。
デスカリは、Timestop からお供の Advanced Balor や Apcalypse Locust を呼び出す。Balor は 2 回も Vopal を発動させるが、Mythic の振り直し能力でこれは防がれた。
その後、ペンテシレイアがデスカリ攻撃するが、命中したかに見えた剣の場所に突如として空間の亀裂が入り、デスカリは攻撃をかわす。
デスカリは、このターン、相手はだいたい死ぬ呪文 Mass Infestation of Worms を発動するが、これはケリアンの展開していた Aroden's Spellbane で阻止された。逆に、ケリアンの Mythic Holyword で、ただの Advanced Balor はなすすべも無く爆散させられる。
空間亀裂の回避はそうそう何回もできないだろうと、他のメンバーも攻撃を続けるが、どうやらこの能力は何回でも使えるらしい。ここでラオツェンは気がついた。多分、この能力がエイローデンが言っていた、Plane Ruler の能力だろうと。そうであれば、元々の Ruler であった先祖の力で止めることができるはずだ。ラオツェンは黒いオーラを出し、自らのデーモン化を促進させつつも、デスカリとの HD 対抗判定に成功し、一時的に Plane を変容させる能力を自らのものとする。

これで回避能力を失ったデスカリはパーティの猛攻を受け、大鎌による攻撃で多少の反撃を行うもののサールディンを止めるには至らず、ペンテシレイアの剣によって倒れたのだった。

・デスカリ様のスペック
  ・CR 29
  ・AC 64
  ・hp 1782
  ・ST +32
  ・SR 40
  ・Atk +51/+46/+41/+36 (4d6+70/18-20/x5 plus poison)

ちなみに、オリジナルのスペックは

  ・AC47
  ・hp 742
  ・ST+32
  ・SR 40
  ・Atk +51/+46/+41/+36 (4d6+70/18-20/x5 plus poison)

というわけで、防御能力だけ盛ってます。オリジナルだと 1 ラウンド持たない。

■思いがけない Abyssal Resurrection

ペンテの聖なる剣撃を受け、Deskari の体はよろめいた。
「…どうやら今回は君たちの勝ちのようだ。だが、次は無い。1 年後を楽しみに待っているんだね。」そう言って、Deskari に Abyssal Resurrection がかかろうとしたとき、突然、その体を中心として時空に巨大な亀裂が走った。
そして、OotRM のメンバーもなすすべもなく亀裂に飲み込まれる。亀裂の向こうは、いつか Asmodeus に連れられてのぞき見た、Dead Vault の外郭だった。
Dead Vault の中心部、Rovagug その人が閉じ込められている魔法の檻から、力を失って漂う Deskari の死体に、一本の紫色の線が延びている。予想の通り、Deskari はいつからか Rovagug の力の影響を受け、その死をきっかけとして、ついにその力と体が Rovagug に取り込まれようとしているのだ。
Abyssal Resurrection によって復活していく Deskari の体は、その虫の下半身が奇妙に伸びて芋虫のようになっていき、人間の体からはかぎ爪のついた無数の足が飛び出してきた。声にならない叫びを上げて狂いながら、Deskari は Rovagug に体を乗っ取られていく。OotRM はその光景を身動きすることもできず、延々と見せられていた。
そして気がつくと、OotRM の面々は懐かしい大地に立っていた。そこは、崩壊した「村」の跡だった。OD が Dead Vault から村の近くに辿り着いたように、どうやら、Rovagug の檻の一部がここに繋がっているようだ。
そして、村の広場だった場所には、わずかに Deskari の面影を残した巨大な異形が佇んでいた。ケリアンは、神パワーで直感的にその存在を理解した。あれは Rovagug の Avatar、封印されてこの方地上に姿を現した Rovagug の僕において、最も本体に近い存在。それは、過去に Golarion を蹂躙した Spawn of Rovagug を遙かに超える力を持つだろう。そして、Deskari が行ってきた Rasping Rifts と Worldwound の貫通事業は、わずかではあるが Rovagug の檻と Worldwound の間に道を作っている。あの Avatar はそこを通って出てきたのであり、今でも本体と繋がっているのだ。
Rovagug の Avatar は全く知性を感じさせない咆哮を上げる。すると、辺りが震えだし、わずかに残った村の残骸は突然砂のような小さな粒子に変わり、辺りは一切の更地になってしまった。こ

れこそが Rovagug の破壊のオーラ、半径 300ft の神以外の存在全て無に帰す能力だ。そして、Rovagug は OotRM がいることなど気にも止めぬように、西に向かって動き出した。
その先には、Kenabres がある。

■人知れぬ神話の戦い

まずケリアンが動いた。今こそ、Sword of the Plane を使うときに違いない。そして、Rovagug がこちらに気がついていない今こそがチャンス。呪文で増強した一撃は Rovagug に命中し、本体との絆を断ち切った。さすがのケリアンにも気がつく余地が無かったことだが、この一撃が無ければ、Rovagug は毎ラウンド本体からのエネルギー供給により regeneration で 1000 点の hp が回復することになっていた。
そして、ここを通すわけには行かないと Rovagug の進路に立ちふさがるその他の OotRM メンバーだったが、まずその破壊のオーラで大ダメージを受ける。これは、Maximized Disintegrate のオーラだが、神以外はセーヴ不可なので、ケリアン以外は毎ラウンド 240 ダメージをターン開始時に受ける計算だ。そして、Rovagug は移動しながらそのかぎ爪で Living Creature を攻撃し、1 人 100 点ほどのダメージを与えてきた。
ラオツェンは弓で、サールディンとペンテシレイアは追いすがって Rovagug に攻撃するが、その巨体故、効果があるのかはすぐには判らない。
メイプルは、シロップに突撃命令を出そうとしたが、シロップは Telepathy で話しかけてきた。
「メイプル、私は、私たちは、あの怪物と戦うために生まれてきたのだと言ってもいい。そうであれば、私はやつと戦うためにこの命をかけたい。具体的には、我々の魂を燃やすことで仲間に Fast Healing250 点が生えるので、これであの Disintegrate オーラに立ち向かうことができる」
しかし、メイプルは言った。「大丈夫、あなたたちが犠牲にならなくても、私たちは負けない。私たちには神先輩もいるから」「…そうか、判った、お前達を信じる。だが、必要な時はいつでも言ってくれ」
そして、シロップは突撃していき、Rovagug を引き裂いた。メイプルはシロップに Positive Energy を注入し続け、周囲の仲間に 250 点とまでは行かないが、100 点越えの Fast Healing を付与していた。
期待の神先輩、ケリアンは、先ほどの Deskari との戦いを経て、DemiGod としての自分の力が完全に覚醒し、もはや Mythic Power を使い放題になったことを悟った。これがあれば、毎ラウンド Mass Heal を放つことも可能だが、何か他の手は無いだろうか。
Mythic Time Stop から Mass Heal すれば、確実に回復が可能になるが、オーラは Time Stop 中にもこちらに影響を及ぼしてくる可能性がある。Mythic Antimagic Field で Su 能力を打ち消す方法も有り得るが、多分あの Aura は Su というか Gd（神常）能力で、Mythic とはいえ普通の Antimagic Field の効果では防げない。自らの Protection Domain を注入し神 Antimagic Field にすれば挑むことはできるだろうが、果たして Deskari の Avatar と自分の神能力のどちらが上か、賭に出る余力は無い。とすれば、やはりここは Mass Heal 連打だろう。というわけで、ケリアンは仲間達を癒やし続ける役割に徹することにした。
サールディンは、Rovagug を攻撃していると、ふっと甘い香りを感じた。そして気がつくと、凍り付いた時の中で目の前に Nocticula が立っていた。
「サールディン、大変なことになったわね。この Avatar、このまま倒せるかしら？そ・こ・で、大サービス、あなたに Smite Demonlord の力を授けようと思うのだけれど、どう？あの Avatar は Deskari の力を核にして出来上がっているから、Demon Lord としての性質も兼ね備えているので、この力が有効だと思うの。命中もダメージも良くなるし、相手を弱体化する効果もついてお得！」「…代償は？」「私の臣下になることよ。あ、大丈夫大丈夫、悪いことをしたことを隠す呪

文もサービスするから、Paladin 能力は失わないわよ！」「でも、僕は僕の中の信念を曲げることはできない。だからこの申し出を受けることはできない」「あらそう、残念、じゃあ、頑張ってね。」

サールディンは何事も無かったかのように Artifact と化した盾で Rovagug の爪攻撃を受け止めながら、剣で攻撃を続けた。
ラオツェンは、弓で遠距離から攻撃を続けた。相手が Demon の属性を併せ持つため、思ったよりも攻撃は効きやすい。そして、Rovagug が時折使う相手を狂乱させる精神攻撃等は、どうやらナインドリアンエリキサーによる特殊能力と同系列らしく、Demon の力を使うことで打ち消すことができる。しかし、その代償は通常よりも高いようだ。「持ってくれ、俺の魂」そう思いながら放たれた矢は Rovagug に次々と突き刺さっていく。
OD は、Rovagug と同じ空間にいると、心の中に潜んだもう 1 人の人格が狂乱するのを感じていた。そして、それは Rovagug の体の一部に、父親のものと思われるローブの破片を見つけたときに、やり場の無い怒りとなってわき上がりそうになった。しかし、OD はそれを意思の力で押さえ込んだ。父も母も死んだ。だが、父は、辿り着きたがっていた真実の欠片に辿り着いて死んだのだから本望だろう。そして、村の仲間を守るために善悪すら超越したこの身にとって、もはや怒りなどは必要無い。こう割り切った OD は、Rovagug の影響を完全に振り払うことに成功した。同時に、その心は Startower の Keeper としてふさわしい、感情に乏しい、その主と近しい物へと変貌を遂げ、それが Mythic Power の源泉となるのを感じた。OD は自分を最大限に強化した後、禁呪：「Telekinesis で Smite してものをいっぱい投げる」を行使し、Rovagug の体を切り裂いた。
そしてペンテシレイアは、Wardstone の力が休息に失われていくのを感じつつも、体が分解しそうになるのを食いしばり、ひたすらに追いすがって剣で攻撃を続けた。足の速いペンテに OD の Mythic Haste がかかることで、高速で移動を続ける Rovagug に常に肉薄することが可能になっていた。そして、何回も攻撃を繰り返し、ついにはペンテシレイアの剣の一撃で Rovagug の Avatar はその動きを止めた。
「ケリアン、Miracle を！」
Demigod となった今の自分の Miracle であれば、Spawn of Rvagug と同様の力をもったこの Avatar も滅することができるはずだ。ケリアンが奇跡の力を呼び起こすと、Rovagug=Deskari の肉体は自壊するように粉となって消えていった。そして、それと共にわずかに残っていた Dead Vault への接続も消失したのだった。

・Avatar of Rovagug のスペック
  ・CR 50
  ・AC 74
  ・Aura aura of disintegration(Fort 34(deity のみ ST 可能）240dmg)
  ・hp 4900(98HD)
  ・regeneration 1000
  ・DR 50/epic
  ・Atk 8 pincer +114 (4d6+95/19-20/x3 plus disintegrate 40d6/Fort26)

■戦いの後に

Rovagug が移動した後は一面の砂地になっていた。村や、その周りの見覚えのある風景はほぼ消失していた。
傷を治し、ぼんやりと OOtRM が佇んでいると、アリティアンが Teleport してきた。
「みんな無事か。…これは、一体何があったんだ？」
アリティアンに説明すると、彼は驚きの表情を浮かべた。
「そんなことがあったとは。君たちは本当に世界を救った英雄、いや伝説だ」

「私は、ガルフリーからの言づてをもってやってきた。まず、ガルフリーはスレッショルドの戦いで命を落とした。彼女と Sword of Valor の力で、スレッショルドのほとんどのデーモンは掃討されたよ。…彼女は、長い間死に場所を探していたのだと思う。そして、君たちこそ、その場所を作ってくれる人達だと信じ、君たちに賭けたのだろう。ありとうございました、と伝えてくれと言われたよ」
「それからもう一つ、彼女無き後の Mendev について、ペンテシレイアに女王になって欲しいとのことだ。ペンテシレイアには血筋による後継権があるわけでは無いが、そのあたりは養子だのなんだので何とでもなる。そして、地上に存在するほぼ最強の Iomedae の Inquisitor にして、Iomedae の Herald と Aroden を継ぐ神の加護を受けたものに刃向かうものもいないだろう。これから、Medev と Sarkoria の復興は大きな事業になる。この地に残された Tielfing 達の扱いや Sense Motive 能力を考えると、ペンテシレイア以上に適正なものもいない。どうだろう、ガルフリーの最後の頼み、引き受けて頂けないだろうか」
「喜んでお引き受けいたします」
「ありがたい。もちろん、私もできるだけ長くサポートするようにするよ。今日の夜は、生き残った者達で祝杯を上げたいから、また後で呼ぶよ」
こう言ってアリティアンはまたテレポートしていった。
アリティアンが消えた後、OOtRM は、荘厳な大聖堂の中にいることが判った。
目の前には、満足そうなほほえみを浮かべたアイオメディが立っていた。
「諸君、良くやってくれた。クリティカルな犠牲を払わずにこのような偉業を成し遂げるとは、地上を歩いていたときの私にすら実現できたことではないだろう。」
「ではサールディン、お前のヘラルドとしての役割は今回のために与えた臨時のポジションだったが、引き続き私の剣と盾として仕えてみないか？」
「前任者はどうなのでしょうか」
「彼にすることももちろん可能だ。しかし、私はお前の覚悟を聞いているのだよ」
「…判りました、お受けいたします」
「ありがたい。お前より強力な存在は、私の配下にはいないのだからね。では、他にないか私にできることはあるだろうか」
「ラオツェンは、今回の戦いのために大きな犠牲を払ってきました。彼を元の体に戻すことはできないのでしょうか？」ペンテシレイアが聞いた。
「…申し訳ないが、それは私の力の及ぶ範囲では無いようだ。専門外だから判らないが、デーモンロードの力自体が Divine であるため、多分他の Divine の力の介入では、副作用無しで実現することは難しいだろう。だが、超超高度な Arcane の技術なら、あるいは」
「シロップ達はどうなるのでしょうか？」メイプルが聞いた。
「それはサーレンレイ様の判断次第だな」
これで質問は無くなり、アイオメディとの会見は終わった。
夜、ケナブレスで盛大な宴会が開かれた。メンデヴ側の主要なメンバーで命を落としたのは、驚くべき事にガルフリーのみであった。
宴が終わりにさしかかった頃、ケリアンが皆の所にやってきた。ケリアンは Demigod として真に覚醒してより、次なる使命を理解していた。それは、Aroden に何があったかを探り出すことだ。Worldwound が空いたことと、Aroden がいなくなったタイミングが同じであることに、何の関係も無いわけが無い。ケリアンにとっては、今回の件は最初の手がかりとして提示されたものだったのであろう。
「本当はみんなにも一緒に来て欲しいんだけど、多分これは僕が自分自身でやらなければならないことだから。じゃあ、また。」こう言ってケリアンは Plane Shift していった。

「これを返しておくよ」サールディンはそう言って、OotRM の副団長の印をペンテに返した。
「Order of the Righteous Might はほとんどペンテの騎士団だったしね」「私、Mendev に新しい Order of the Righteous Might を作る。サールディンの魂はその騎士団が受け継ぐ。」
「うん、では、僕もここらでお別れを。必要があれば、いつでも Gate や Planar Ally で呼んでくれ。それじゃあ」そう言って、サールディンも Iomedae の御許へと飛び去った。
「俺は Startower にいるから。困ったことがあれば。」OD もそう挨拶して、Teleport していく。そしてラオツェンは、いつの間にか姿を消していた。
メイプルの所には、シロップがやってきた。
「サーレンレイ様のところにお伺いを立てにいったよ。それによると、私たちは引き続き、この地を守れ、ということらしい。だがメイプル、God Caller の契約は終わりを迎えたようだ。今の私たちは、通常の人間が使役するにはあまりに強力すぎる。だから、君とはお別れしなければならない…。もちろん、メイプルのサモナーとしての力は残る。だから、私の影のような、だが普通のエイドロンを呼ぶことは可能だ。そして、一度君に危機が訪れれば、かならず助けに行くことを約束しよう。さらば。」
こう言って、シロップは消えていった。以降、呼び出されたシロップはほぼ同等の能力をもってはいたが、シロップのように語ることは無かった。
そして、残されたペンテシレイアはすぐにメンデヴの女王として即位し、メイプルはその許で働くこととなった。

■その後

ペンテシレイア
メンデヴの女王として余生を過ごす。Worldwound の土地を Mendev の一部として併合し、その地に残った Demon 達の掃討を行った。Tielfing としての天寿を全うし、70 才で死亡、その後、Iomedae の Saint として活躍することになった。
メイプル
ペンテシレイアの下で Magister として働く。Sarkoris の代表として、Mendev の併合がスムーズに行くように働きかけたという。メイプルの Eidolon の突撃に耐えうる生物はそのあたりには存在しなかったので、誰もこのおどおどした Magister に逆らうことは無かった。
OD
Startower で暮らしつつ、Worldwound や Dead Vault の研究を続ける。特に、各地の Startower の力が経年劣化で失われつつあることを苦慮し、ペンテシレイア等を通じてその復活に尽力した。アリティアンが去った後、ペンテシレイアに危機が訪れたときには、OD が魔術師として助けたという。
サールディン
Iomedae のヘラルドとしてその後も活躍を続ける。その少々 Vrock のような見た目は、信徒の間では「天使 + ドラゴンの特徴」ということになり、サールディンは「Half Celstial Gold Dragon の人間形態」という学説が定着していった。本人はそんなことはつゆ知らず、自分が Tielfing であると言うことを忘れたことも無ければ、逆にそれを恥じることも無かった。なお、お布施の交渉がうまくなることは無かった模様。
ラオツェン
宴から姿を消した後、真の姿に戻るための方法の探求を始めた。度々 OD とは会っていたようだ。その探求が実ったかについては判らないが、Deskari のドメインだった Rasping Rift をその後 Demon Lord が支配することは無く、他の Demon Lord がその地を配下に治めようとすると、どこからともなく矢が飛んできて殺されてしまう、という伝説が生まれた。

ケリアン

Aroden の謎を追って、各種 Plane を放浪する。その旅の結果がどうなったかは判らないが、知識と謎を探求する下級神として、魔術師などを中心に信徒を増やしていったらしい。Rovagug を退けた 2 月 18 日が彼の祭日となり、その時はご神体に向かってなぜか Magic Missile を撃つのが習慣になったとのことだが、その神官もその意味は判っていなかったという。